リウムシンチグラムでも縦隔・肺門に著明な集積を示した．ツベルクリン反応は陰性であった．心房細動は始めは DC で容易に除細動出来たものが抵抗性となり，ステロイドを使用する契機となった．これにより糖尿病が誘発され重症化した．筋肉痛，肝腫張が著明となり，腹水も出現した．UCG で EF の低下が示された．肝腫張・腹水は利尿剤，アルダクトンにステロイドを併用すると軽減する感があった．ところが平成5年6月に大腿頚部骨折，胸椎6，9の圧迫骨折を起こし，同年12月には胃潰瘍からの出血でショックに陥りステロイドの継続がためらわれた．ステロイドを中止すると肝腫張が著明となりコレステロールが低下する傾向がみられた．そこでパルス療法的な間欠投与とした．ステロイド投与により，ACE は低下し，ツベルクリン反応は陽性となり，ガリウムシンチグラムで縦隔・肺門への集積は見られなくなって平成7年7月にステロイド投与を中止した．現在尚，筋肉痛と右季肋部の圧迫感が持続している．

### 5）急性下肢深部静脈血栓症に対し血栓除去術と動静脈シャント造設を施行した1症例

目黒　昌・長谷川　豊（新潟こばり病院 心臓血管外科）
高橋　善樹・丸山　行夫
江口　昭治（財団法人新潟心臓血管医学研究所）

59歳男性．数日間の臥床後に左下肢に疼痛と腫脹が出現したため当科を受診．深部静脈血栓症（DVT）の診断で同日入院．1昼夜の線溶療法で改善しないため翌日手術を施行．肺塞栓の予防目的に対側の大腿動脈から一時留置用 IVC Filter を挿入した後，Fogaty catheter で血栓除去を行った．操作中左総腸骨静脈に抵抗があり，iliac compression と思われた．再疎通を得た後，径 4mm の人工血管で左大腿動静脈シャントを作成した．術後腫脹と疼痛は速やかに改善した．CT と静脈造影で左腸骨静脈から IVC 末梢まで血栓の残存を認めたため，7病日に Greenfield Filter を経皮的に留置した．経過良好にて14病日に退院した．

## Ⅱ．テーマ演題「心筋疾患」

### 1）成人におけるアドリアマイシンの心毒性の検討―心エコー図による

岡田　義信・堀川　紘三（県立がんセンター 新潟病院内科）
佐野　宗明（同　外科）

【目的】アドリアマイシン（以下 ADM）を投与された多数例の心機能 EF を心エコー図を用いて求め，ADM の心毒性の特徴を明らかにする．

【対象】当院にて，過去9年間にアントラサイクリン系薬剤では ADM だけが投与された成人の女性89名，男性5名計94名の患者に，1人平均1.6回の心エコーを行い，得られた148例を対象とした．原疾患は，乳癌137，他11であった．

【結果】EF は，第一に ADM の量が増加するほど，第二に高齢者ほど有意に低下した．他の因子は有意でなかった．50歳未満では，ADM の量が増すにつれ EF は一定の割合で徐々に低下したが，高齢者では，一定量に達すると EF は急速に低下した．しかし，EF の変化には個人差が少なくなかった．また，9名に心不全が発生した．【結論】以上の EF の特性から，心不全を発症させずに ADM を大量に投与する方法を考案可能と思われる．

### 2）糖尿病心における交感神経活性の低下と心機能

津田　隆志・山口　利夫（木戸病院 循環器内科）
宮島　武文
津田　晶子（同　内科）

【目的】心不全心では心臓交感神経活性の低下を認めるが，糖尿病においてよく認められる心臓交感神経活性の低下が心機能低下に関係しているか否かを検討した．

【方法】対象は，自律神経障害を伴わない糖尿病患者5例（平均年齢53歳），副交感神経障害のみ4例（同53歳），副交感神経障害に交感神経障害を伴った9例（同45歳）である．心臓交感神経活性の評価は，$^{123}$I-MIBG 心筋像を用い，静注4時間後の後期像での心筋/上縦隔比（H/M 比）と SPECT 短軸像（短軸）での欠損部位の広がりより3段階に分類した．心拡大や壁運動低下は心エコー検査により判定し，虚血例は除いた．【結果】① $^{123}$I-MIBG 心筋像より，Ⅰ群（H/M 比，短軸共に正常な，心臓交感神経活性正常例）1例，Ⅱ群（H/M 比正常，短軸で下壁から後壁での限局した欠損を示す心臓交